

高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話

橋尾 直和

1. はじめに

本稿は、高知県立大学における学長助成事業である「平成30年度戦略的研究推進プロジェクト」に採択されたテーマ「言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育」の調査研究の一環として実施した、「高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話」調査の報告である。

まず、本プロジェクトの構想の背景と目的について、述べておきたい。

【プロジェクト構想の背景】

本県の「民話」（昔話・伝説・世間話など）の採集は、昭和10年代から始められ、戦後も、研究者たちによって貴重な話が記録されてきた。しかし、一般的には民俗調査の副産物として偶然採集されたものが多く、内容、形式に関心が集中し、話のみを採集し、語りの場や伝承経路、話の機能、家やムラなどの話者をとりまく諸問題との関連を明らかにしたものは、あまり見られない。民間伝承としての「民話」は、他の民俗事象と同じく家やムラを離れて存在するものではなく、それを生み出し伝承してきた地域社会との関連において、構造的・総合的に考察しなければならない。「語り部がいなくなった」と言われる昨今であるが、調査の手を差し伸べられずに眠っている語り部はまだ存在する。全国には多くの民話集や調査報告書が刊行され、もはや整理と比較研究の段階に入ったとも言われているが、高知県にはまだ学術的調査から取り残されている地域が多い。これらの地域における正確な記録・保存活動を急がねばならない。すなわち、本県における「民話」という地域文化資源の再発見とその利活用という発想が求められる。

また、採集した「民話」を教育現場に還元する、いわゆる「地域還元型教育」という発想も必要となってくる。地域の文化資源である「民話」のもつ教育力を大いに教育現場で活用することである。語り部が「民話」を生徒・学生たちに語ることは、地域文化の次世代への継承へとつながる活動となり得る。「民話」に登場する地名、文化財、伝統行事、風習、方言などを生徒・学生たちが調査研究することにより、地域の歴史・文化・環境などを同時に学ぶことができ、学習指導要領に掲げられている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と重なるところである。これはすなわち、本事業が展開しようとしている言語文化教育としての「民話」を活用した地域還元型教育研究が、大学のみならず小・中・高等学校の教育理念と連動していることを意味している。「継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることをねらいとしている」理念と合致している。この点は、本学の掲げる中期計画の「高大連携」の目標と合致するところである。

【プロジェクトの目的】

本事業は、本県の「民話」の伝統的な型を多分に残している大豊町岩原と物部町別府の「民話」の記録・保存活動を基にして、「言語文化教育」としての「民話」を活用した学術的・国際的な地域還元型教育にアプローチするため、学際的なメンバーで構成されている。文化環境言語学的調査研究は代表者の橋尾直和、国語教

育学的調査研究は井上次夫、中国古典・説話文学的調査研究は高西成介、人間学・哲学的調査研究はオバーク・アンドリュース、近代文学的調査研究は田中裕也が実施する。

なお、学外協力者として、高知県立歴史民俗資料館の梅野光興学芸員、豊永郷民俗資料館の釣井龍秀学芸員、香美市教育委員会生涯学習課の小林麻由文化班職員らのアドバイス・協力を得て事業を実施する。現地協力者として、「民話」の語り部である大豊町岩原の下村堯基さん、物部町別府の松本善夫さんに「民話」の記録・保存調査、ワークショップ等での協力を得る。

具体的には、文化環境言語学の立場から、「言語文化財」としての観点から、大豊町岩原と物部町別府の民話の記録・保存活動を行い、民話とその「文化環境」との関わりについて考察する。ICレコーダーで収録した民話を教材用としてCDに保存し、教育現場に還元する。国語教育学の立場から、国語教科書における「言語文化教育教材」という観点から小学校・中学校・高等学校の調査を行う。本県で採取された民話の分析を行い、教育教材としての民話のあり方について考察し、新学習指導要領に対応した教材化を行い、校種別教材を作成する。小学校・中学校では「伝統的な言語文化」の観点から、高等学校では古典の観点から指導目標を設定し、教材冊子として発行し、解説を加える。また、教材化研究、教材冊子作成に際しては、国立教育政策研究所・東京学芸大学等を訪問し、資料や助言を得る。近代文学の立場から日本近・現代文学と高知の「民話」との関わりを調査・研究する。本プロジェクトの調査地域とも関わりが深いタクラ・テル、笹山久三や中脇初枝などの「民話」の受容と創作のありようを明らかにする。この調査で地域共同体の中の「民話」としてだけでなく、日本の中で作品として通用することを考察する。人間学・哲学の立場から、本県の「民話」における宗教と信者の信仰との関係を考察する。

本稿は、このうちの「文化環境言語学」の立場から実施した、研究代表者である筆者の担当する民話収集活動の報告である。当初、両年度にまたがって、大豊町岩原、物部町別府のそれぞれの地点ごとに調査する予定であったが、両地点の民話を比較対照させることを目的とし、初年度に両地点の調査を実施することにした。大豊町岩原の調査は、2018年9月14日、11月14日、12月12日、2019年2月12日、物部町別府の調査は、2018年10月21日、11月22日、12月20日、2019年2月12日に実施した。面接調査を採用し、話者の話す音声をICレコーダーに記録し、文字に書き起こしたものを採録した。

インフォーマント（資料提供者）は、大豊町岩原在住の下村堯基さん（1935年1月2日生）、物部町別府在住の松本善夫さん（1943年11月29日生）である。お二方とも、はえ抜きの話者である。

2. 調査地点の概要

2.1 長岡郡大豊町岩原

高知県長岡郡大豊町は、四国のほぼ中央、愛媛と徳島の県境にある山間の町である。さらに岩原地区は、町の北東部にあたり、町を流れる吉野川の東岸に位置する集落である。

標高203mにあるJR土讃線土佐岩原駅から標高約830mまでの急峻な傾斜地に集落があり、豊かな自然が残る山間の地域で、ゆったりとした時間の流れの中で、昔ながらの生活が営まれている。

岩原は、世帯数が63世帯、人口が121人（男性62・女性59）（2018年12月末現在）である。

この地域に伝わる岩原神楽は、「磐原神社の創祀沿革」によると、天慶（938～947）天曆の頃（947～957）岡崎権六郎重良が伊勢より勧請し、奥荒に社殿を建立し、伊勢大明神として祀った際に奉納したものがはじまりと伝えられている。のち享徳2年（1452）大洪水のため三宝山に社地を拓き、翌3年遷宮に奉納した人達の

子孫が、今なお「神御子」として直接神に仕える制度が残されているところから、神楽はこの時代より始まったものと思われる。

その内容は、神祭りに際して^{とうや}俵屋を立て、酒宴を開いて「散華」と称する六根清浄の行をおこない12月の月歌をうたって、時には乱舞し、その後その家の庭先で神楽を舞う。これは県下的にも他に類例を見ない貴重なものである。楽器は大太鼓と鉦拍子である。その舞での持ち物によって、幣の舞、双刃の舞、二天の舞、弓の舞、長刃の舞、扁芸の舞、魚夫の舞、舟の舞、鍬の舞、宇賀の舞、宝の舞、四天の舞、猩々の舞、獅子の舞などがあるが、すでに忘失されたものもある。神楽を俵屋の庭先で舞い「散華」を行い、手面をかぶり、白装束で芸術的な所作を展開するこの神楽には芸能以前の古い名残が少なくない。



図1 長岡郡大豊町岩原の位置 (釣井編 2011 : p.1 による)

2.2 香美市物部町別府

高知県香美市物部町は、徳島県と境を接する険しい山岳地帯に位置し、焼畑農業や林業、椿、三桠の栽培を主な生業としてきた。また、柚子の栽培でも知られている。林業を支えるために、大栃などの中心部には鋸や厚刃物の鍛冶屋があった。近年は増えすぎたシカの被害が問題になっているが、以前から狩猟も盛んな土地柄であった。平家の落人伝説も各地に残っているが、確かな史料が残るのは、大忍庄や葦生郷と呼ばれた中世以降である。

物部町別府は、世帯数が29世帯、人口が40人(男性19・女性21)(2018年12月末現在)である。

この地域に伝わる「いざなぎ流」は、香美市物部町を中心とした地域に伝わる民間信仰です。「太夫」と呼ばれる宗教者が、家や村の神の祭り、大山鎮めや荒神鎮め、米占い、病人祈禱などに携わってきた。神々を祭る時は、「祭文」と呼ばれる神の由来を語る物語を読み上げ、数珠や笹竹を使った占いで神の意志を確認するため祭儀は長時間を要する。普通の屋祈禱で一日がかり、本格的な大祭になると三日から一週間かかる。また、神を祭る時は、御幣を何十本も三階の棚に切り飾る。仮面は、神としてあがめられ、太夫達もその扱いには真

重である。

そのルーツは謎であるが、陰陽道や修験道、神道や巫女の信仰などが渾然と一体になったもののようである。同様の信仰は、各地の民俗芸能の神楽などに断片的に伝えられているが、「いざなぎ流」ほどまとまった形で残った所は、貴重である。

「いざなぎ流」を伝えてきた香美市物部町は激しい過疎のため人口減が止まらず、神祭りの実施も困難な状況に陥っている。

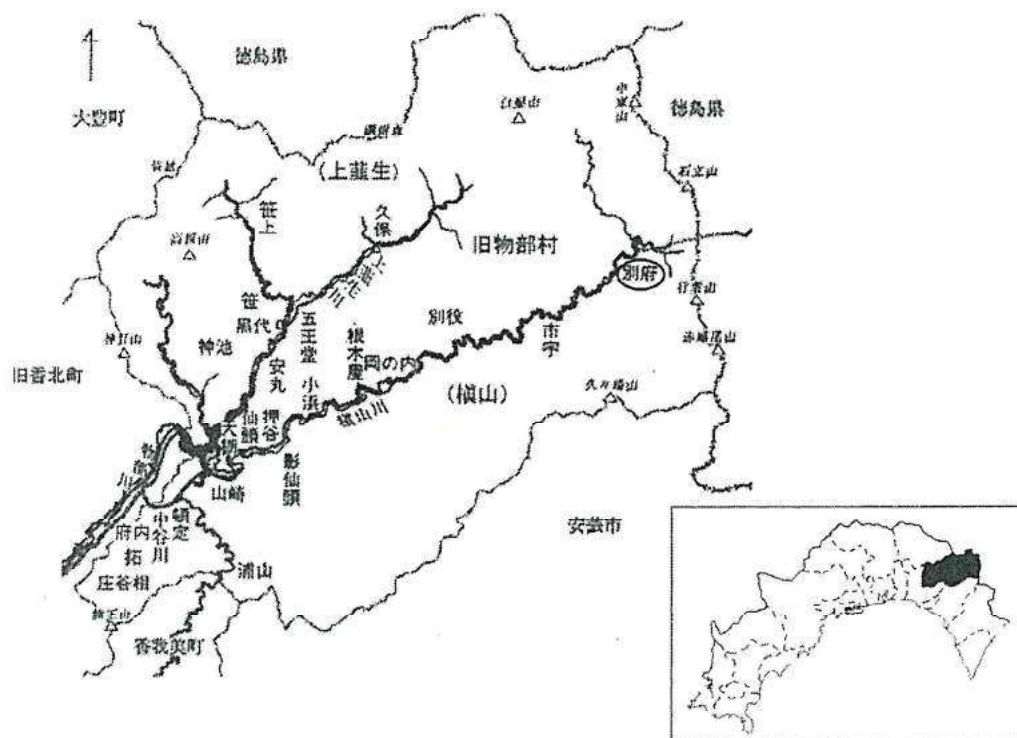


図2 香美市物部町別府の位置 (小松 2011 : p. 4による)

3. 民話の分類方法

福田 (2000) は、民話を「神話」「伝説」「語り物」「昔話」「世間話」の5つのジャンルに分類している (表1)。ここでは、主な〈伝承者〉〈伝承の機会〉〈伝承意識〉〈証拠の有無〉〈時制〉〈固有性〉〈述形式の有無〉に基づいて分類している⁽¹⁾。

これらの基準にしたがって、各ジャンルをまとめると、下記のとおりである。

	〈伝承者〉	〈伝承の機会〉	〈伝承意識〉	〈証拠の有無〉	〈時制〉	〈固有性〉	〈述形式の有無〉
神話	司祭者	祭儀	疑えない事実	ナシ	神の世	アリ	アリ
伝説	古老	祭儀の周縁	信すべきコト	アリ	古へ世・中つ世	アリ	ナシ
語り物	専門的語り手	祭儀の周縁	あったとされる史実	ナシ	中つ世・近つ世	アリ	アリ
昔話	語り爺・語り婆	イエの炉端	あったかなかったか	ナシ	遠い昔	ナシ	アリ
			不確かな虚				
世間話	世間師	談合の場	あったことが疑えない	ナシ	近代	アリ	アリ
			事実				

また、各ジャンルの伝承上の特質である主題・観念・思想に基づいて分類している（表2）。

これらの基準にしたがって、各ジャンルをまとめると、下記のとおりである^②。

- 神話 : 国土・人類・文化の起源を主題とし、大自然の営みを畏怖する観念で、大自然の始原を尊ぶ思想をもつ。
- 伝説 : 聖なるコト・モノの由来を主題とし、小自然の営みを畏怖する観念で、小自然の起源・崩壊を恐れる思想をもつ。
- 語り物 : 異常な不幸がを主題とし、人間存在の可能性を否定する観念で、人間の不幸を確認する思想をもつ。
- 昔話 : 異常な幸福を主題とし、人間存在の可能性を肯定する観念で、人間の幸福を確認する思想をもつ。
- 世間話 : 奇異・不思議な伝説を主題とし、人間・社会に畏怖・驚嘆する観念で、人間社会の現実を見極める思想をもつ。

また、立命館大学説話文学研究会編『高知・西土佐村昔話集』（1983）は、高知県幡多郡西土佐村（現四万十市西土佐地区）にて昔話を収集し、分類した民話・昔話の調査報告書である。ここでは、収集した昔話を、『日本昔話名彙』に準拠し、『日本昔話大成』を参考にしながら、分類・配列している。そして、「動物昔話」「完形昔話」「因縁・化物語」「笑話」「形式譚」「伝説」「世間話」の7つのジャンルに分類している^③。さらに、福田（2000）での分類における〈伝承者〉に当たるものを、「昔話の伝承系譜」、〈伝承の機会〉に当たるものを「昔話伝承の機会」としてまとめている^④。

本稿においては、福田（2000）による、民話を「神話」「伝説」「語り物」「昔話」「世間話」の5つのジャンルに分類する方法を採用し、高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の調査で収録した民話を各ジャンルごとにまとめて報告する。

話者のお二方とも、民話の伝承の機会とは、まだ囲炉裏端のある家に住んだことがあったことから、家族の団樂の時間に、民話が伝承されることが多かった。仕事仲間から、近所付き合いの中で、近隣住民との雑談の中で話を聞くなど、類似点が見られた。一方で、岩原の祭りなどで伝承されることやいざなぎ流の祭事や、太夫さんから伝承される点で、地域差が見られた。

表1 民話の分類（福田 2000 : p. 5 による）

	神話	伝説	語り物	昔話	世間話
〈伝承者〉	司祭者	古老	専門的語り手	語り爺 語り婆	世間師
〈伝承の機会〉	祭儀	祭儀の周縁	祭儀の周縁	イエの炉端	談合の場
〈伝承意識〉	疑えない真実	信すべきコト〈信仰行為〉	あったとされる史実	あったかなかったか不確かな虚構	あったことが疑えない事実
〈証拠〉	ナシ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ
〈時制〉	神の世	古へ世 中つ世	中つ世 近つ世	遠い昔	近代
〈固有性〉	アリ	アリ	アリ	ナシ	アリ
〈叙述形式〉	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ

表2 各ジャンルの伝承上の特質（福田 2000 : p. 7 による）

	神話	伝説	語り物	昔話	世間話
主題	国土・人類・文化の起源	聖なるコト・モノの由来	異常な不幸	異常な幸福	奇異・不思議な伝説
観念	大自然の営みを畏怖する観念	小自然の営みを畏怖する観念	人間存在の可能性を否定する観念	人間存在の可能性を肯定する観念	人間・社会に畏怖・驚嘆する観念
思想	大自然の始原を尊ぶ思想	小自然の起源・崩壊を恐れる思想	人間の不幸を確認する思想	人間の幸福を確認する思想	人間社会の現実を見極める思想

3. 高知県長岡郡大豊町岩原の民話

大豊町岩原では、全部で12話を収集できた。内訳は、伝説が2話、昔話が2話、世間話が8話となった。漢字を当てることのできない人名、食べ物・名称などはひらがな、漢字を当てることのできない地名、生活用具（民具）などはカタカナで表記している。

【伝説】

岩原八幡神社の始まりの話

どういうわけで、天草四郎の応援に行ったかは、わからんですけどね、行ったことは間違いない。その時に、「無事帰れたら八幡神社としてお祀りする」というお願を懸けて、かまどの石を負って行ったそうすね。そして、いくさには負けたけど、一族郎党がみな無事で帰り着いたと。今は八幡畝^{はちまんうね}と言いますけど、昔は中畝^{なこうね}に、無事帰ってきたので、八幡神社をここへ勧請して、お祀りをして、下村一族の先祖として、八幡様としてお祀りしよったんですが、いつの時代か、部落の八幡様でもあり、愛宕神社^{あたご}という火事の神様を合祀して、岩原部落でお祀りをするようになったんですね。

三谷集落の話

そこの三谷という集落。今は、16戸ぐらいしかないんですけどね、戸数は。最盛期には、20戸、20数戸あったと思うんちゃけど。まだ、三谷と言う集落が完全にできてない時期でしょうねえ。集落としての共同体が、できてからの事ちゃけど。ここから、まさか上流には、人はおりゃあせんろうという、そういう観念で、みなさん仕事もしたりしよったら、ある日突然上流から、茅で作った箸が流れてきて。ほして、これは上流に人がおるに違いないということで、上がって行ってみたら、そこに一家族、ちょっと離れたところですけどね、一家族生活してたという。

【昔話】

たぢかわ 立川送りの話

ここらではその、立川送りっていう、あれがありますわねえ。で、立川の番所へ、割り当てで、行かないかんというけん。ご馳走食べとうなったらねえ、「明日か明後日は立川へ行かないかん」て言うて、騙したっていう話も、聞きましたですねえ。ここらでは、各個別にぢゃなしに、何人かをグループで立川へ行けど。こっから立川行くとしたらねえ、夜中にここを出発せにゃあねえ、大杉よりまだ遠いですけんねえ。まあ、昔の人は歩くのには、だいぶ早かったとは思うけん、ただし、国道があるような状況ぢゃないですけんねえ。

シデンタキの話

岩原には、シデンタキというて、死んで出るタキと書いて、字はほんとはどう書いてあるかは、わからんのぢゃけん、シデンタキっていうタキがあります。水は落ちてないんです、ただの崖っぷちですけん、落差100メートル以上あるけん、ここらでは大きなタキの事を、デンダキと、デンダキとも言います。それはね、規模の大きいタキのことを言うんですけん。そのデンダキと言うんには、最もふさわしい、岩原では一番ね、高低差があるタキぢゃと思うんですけん。で、それは、実は姥捨て山の伝説がありまして。ロクイチ（※1）を祝うたら、そこから放りよったと。んで、人に税金がかかる時代があったようぢゃけん、ほんでもう役立たずになって、生けず死なずっていうになった人をですね、そこへもう放りよったと。

（※1）還暦の意。

【世間話】

としだま 年玉の話

岩原の庄屋の小笠原家の丁稚が、忘れたらいかんけんというんで、年玉、年玉というて、丸の川の飛び石を渡りよって、火玉^{ひだま}になって。ついつい、火玉でそのまま、筏木^{いかだぎ}の長尾という庄屋の所へ、長尾、長い尾っぽですね。もうその家は、無いんぢゃけん。その長尾という庄屋へ、年玉を遣わないかんのを、「正月の挨拶に火玉を持ってきました」と言うたら、「正月そうそう火玉とは何たることぞ」ということになったそうぢゃ。

琴平の遊郭へ行った話

これも実際にあった話ぢゃけん。これは、琴平の遊郭へ行った人がですね。それはちょっと知能の遅れた人で。遊郭に上がって、いざ行為に及んだところが、女郎さんの方が、なかなか男がしまいやせんけん、ちょっと文句を言うたらしい。ほいたら、「たった一突き（ひとつき）のはずぢゃった」と。「土佐の一月（ひとつき）は30日ござる」。「ほろどえるようなら銭戻せ」。ほろどえるっていうのはね、「泣き言言う」ようなら、というような意味でね。ほんでもう、姐さん観念して、「ほんなら、姐さんもとからすっぱりやり直して。言ったっていう話よね。それも実名も有るんぢゃけん、その実名がは忘れたけんね。

青坊主の話

これはそれこそ実話で、大正時代か昭和の初期ぢゃと。実は粟生^{あお}という、定福寺のあるところ、あそこの秋田っていう前に、店があったんぢゃけん、今もうやまって、ないですけん。そこがもう秋田百貨店っ

ていう、何でも屋ちゃったんですね。ここらでは、日常生活品を買うのは、全部そこで買って、それをオイコ（※1）につけて、負って戻りよったんですね。で、日が暮れて帰って来よって、昔の村道というのを、この向こうまでずっと粟生まで続いとるんですね。その道を、まあ一生懸命歩いて来よって。首吊り畝ぢや、^{らんとう}卵塔ぢやというような寂しい寂しい所をですね。そこをずっとこう、行きよって、卵塔の所でひょっと後ろを振り返ったら、青坊主が、「後ろをついて来よる」、と思うて、それから3キロばあ走って、もうどうしても走れんと思うて、座り込んで、ひょっと振り返ってみたら、秋田という所で柄杓を買ってですね、オイコへこうつけて、差しちよったのがねえ、柄杓が見えて、それが青坊主に見えて。それはもうまっこと、その人はもう必死で、そこまで3キロばあほど走ったということです。

（※1）背負い子。荷を背負って運ぶための道具。

茅の運搬の話

屋根を葺く茅の運搬を、せにやあならんようになって。部落共同で運搬をしようとしたところが、^{じゅうしゅう}重衆という人が、やすば（※1）ごとにあんまり荷を直すので、しゅうぞうという人が見かねて、「重衆、そこをのいてみい。おらが荷を直してやる」こう言うて、親切にいたところが、「貴様おらをわやにすな」と。「ここは、一人前^な経たんものは、来ちゃおらんはずぢや。人のさいろく（※2）は放っておいてくれ」と言うて、その場は終わったんですが。次のやすばかどつかで重衆の話が出て、「重衆もああいうすくたれ（だらしな者）ぢやけん、嫁にも来てがないわ」と言う話が、たまたま重衆の耳に入って、重衆が「へごなことを言うな。かんぢやの様（※3）でも、貰うてみにゃあわかるまいや」こう言うて、皆さんの前で、^{なんか}嘆息を切ったそうぢや。

（※1）休憩場所の意。（※2）差配のこと。（※3）加持屋の娘。加持屋は屋号。

志和久寿万翁と仙師の話

^{いかりぎ}筏木という部落に、熊本の医大を出た偉い志和久寿万翁という、お医者さんがおったそうです。そのお医者さんの所へは、いろいろな患者さんが来たようですが。一里ぐらい離れた所で、^{そまし}仙師が膝へ、ソマ（※1）が刺さったということで、これは^{おおごと}大事ぢやと。「一滴の血も出ん、けんど冷たい」とこう言うて、「へんしも（※2）みんな来て、かいて（※3）降りてくれ」と言うことで、戸板に積んで、4人がかりでかいて行ったそうです。病院へ行って、先生が「どう、その手を^の除けてみい」とこう言うて、手を除けると、中からアオビキ（ヒキガエル）がピュッと飛び出たと。みんなあが、ほんと、大笑いするやら、憤慨するやらで、一代の語り草になりましたね。

（※1）手斧のこと。（※2）「急いで」という意味。（※3）この場合、戸板などで担架のように担いで運ぶこと。

音市さんと山鳥の話

^{おといち}音市という人が、岩原の隣部落の^{あるき}有瀬という所におったんですが。この方は、製材をするのが本職で、山へ行きついたのが10時ちよっと手前。ちよっとひだけて（※1）行くというタイプの人でしたが。まず行ったら、一番先、発動機をかけて、発動機の音が、一定の音で、タンタンタンタンというような音がしだすと、山鳥がそれに反応して、出てきたそうです。で、音さんはオガの刃を、オガ材の上へ上がってですね、すりよったら、山鳥が前を横切ったんで、発動機のエンジンも止めんまま、ずうっとその山鳥を追っかけて、1日やって帰っ

てみたら、発動機はもう、燃料が無いなって止まって、オトさんは、山鳥はよう捕まえん、仕事は全然せんずくに(※2)、1日棒に振ったと、いうことちゃった。

(※1)「日が高く昇る」という意味。(※2)「しないままに」という意味。

おといち 音市さんとお餅の話

おといち 音市さんと言う人は、年末に、正月に搗くもち米を分けてもろうて。ついでにお酒を貰うて飲んだそうですね。ところがもうそこで寝てしもうて、ほしたら正月の朝になって、餅をどうするろうと思ひよったら、もち米をご飯に炊いて、餅に搗いたそうですね。ほいで、一般の人が正月前に搗いて、はやす(※1)より、もっと早ようにお雑煮を頂いたという話が。それも事実ぢやそうですね。

(※1)餅を切り分けることの意。

じや 蛇の出る淵の話

有名な怖い淵があつて、そこへ恐々行つて、魚を釣りよつたら雨が降りだして、そしてもういのう(※1)と思ひよつたら、そこは蛇(※2)が出るっていうてね、竜のことぢやけんど。出るので有名ぢやつたらしい。上で木こりが木を伐りよつて、実は、雨がボロボロ降り出いて、伐った木が滑つてですね、その淵へまっすぐ飛び込んだらしい。そしたら、その下であめご釣りよつた人は、いよいよ蛇が出たと。結局ね、山師が木を伐ったのを失敗して、それが飛び込んだらしいんぢやけんどね。そこでその淵は、蛇が出るっていうんで、ますます有名になつたらしいですねえ。

(※1)「帰ろう」という意味。(※2)竜、大きな蛇の意。

4. 高知県香美市物部町別府の民話

物部町別府では全部で11話を収集することができた。内訳としては、伝説が6話、昔話が3話、世間話が2話だった。漢字を当てることのできない人名、食べ物、名称などはひらがな、漢字を当てることのできない地名、生活用具(民具)などはカタカナで表記している。

【伝説】

たかきびの穂の話

体格のでっぷりした、一人のおじいさんが、毎年暮れに来よつた、そして泊まって。どっから来たとも知れん、どこへ去つていったとも分からんじいさんが来よつた。そのじいさんが、泊まらしてもろうてお世話になつたんで、どっからともなく持ってきたたかきびの穂を一穂、お礼にくれたという話が残りちゆう。「そのたかきびの穂をつくつて、たかきび餅を来年はつくつて、わしに食べらしてくれい」と。こういう話があつて、それを毎年毎年、たかきびをつくれば、大きな穂ができて、いっぱいたかきびができたよと、それを餅にしてもてなしよつた時代が昔あつたと。

そのじいさんがいつの頃か、だんだん泊まらず宿にしても、得体が知れないじいさんなもんで、なんか不気味にもなつてきた時に、大豊の方へ越していく昔の街道筋のそばに、大きな岩がいくつかある。その岩と岩の間に大きな骨があつた。そこでそのおじいさんが、亡くなつちよつた。もうそれから、餅を食べに来ざつたと。その場所は、昔はいざなぎ流の太夫さんがおつたんで、色々差し障りもする時に、太夫さんが占うてみ

たら、そのところに行き倒れがあつて、成仏ができてないと。それをちゃんと祀って、鎮めないかんいうので、そこに上がっていく所が、「成仏」という山の途中の名前。そのあつた所が、亡くなつたろうか、という場所が、「ウスノクボ」という。臼のような骨があつたという。その骨は、脊椎の臼のような形ぢやたんぢやろうと思う。

そこにはね、自分の山なもんで、手近な所なんで、ようその昔話で、子どもの折から聞いて、その山へは、旧の暮れの28日には、行つたらいかんと。旧の暮れは、28日を省いた日に、注連縄と餅を、たかきび餅をね、進めてやらないかんと。いつの頃から続いたかわからんけど、自分は、足が元気なうちは、注連縄と柿と餅を今でも供えちゅう。

七人ミサキの話

別府での聞いた話では、この物部の目の前の川にね、材木の伐り出しの、筏に組んだ川流し。昔はそれをする技術は、この地域にはなかったんで。筏流しという。信州のベテランの方が七人衆でやってきて、伝えてくれたという話が残っちゅう。物部川の水は、あまり水量が無いもんで。なかなか筏に組んで流すにしても、流れんのよね、材木がね。そこで信州の来ちよつた人が教えてくれたのは、川の淵尻へ筏を組んで、そこへ、山の苔をね、岩に生えちゅう、それを詰めて、水を貯める、木材でダムを造つちよつて。そこへ水がいっぱい貯まって、材木がそこへ来た時に、材木の一本をトビグチで外したら、全部その貯まった水で流れていくという筏流しを、教えてくれたという。

それもずうっと、何日も何日も習うて、覚えたころに、もうある程度習得できたんで、その川下で作業される時に上の堰を切つたらしい。そしたら、一気に流れて亡くなった、という伝説が残っちゅう。それも、そういうことをした後に、もの凄い大雨が降って、雷が鳴って、滝のような雨が降って、その雨も血の雨が降つたという言い伝えがある。

そうしたものを、そんな無残に、お世話になったものをしたということで反省をして、七人ミサキ、というものをね、川ミサキ、七人ミサキ、そういうものを、いざなぎ流の太夫さんが、七人の御霊を鎮めて、もうのちのちも無事にみんなが暮らせるようにと言うんで、供養してそれを祀つた。というその七人ミサキというのは、いざなぎ流の祀り方で、御幣もそういうのがあつて、お祭りをするときには、七人ミサキの、注連もして、お餅も米も進ぜる所です。もう山のミサキへ、見晴らしのええ所へ祀つちよつた。

それは自分たちの、もう場所が悪いけんでよう行かんけども、ほん若い頃、供養柱も作って、太夫さんがそこへ祈って、何年経ってきても、年がきたら、またそのものの供養もしてという、お祭りも繰り返しやりよつた。それに対する、餅と、注連というのを自分も、ずっと先輩から習うてきたものを、去年まではした。

「塩」の話

昔、兄弟の力持ちの人が住んちよつた。その方の名前が、助六に助七、でしたか。その方が残しちゅうのが、力の仕事とか。あの塩が峰に昔、赤岡の方の神社へ、奉納相撲とかする時には必ず行きよつた、という話がある。塩の道の時代に褒美を頂いたのが、塩が峰で祀られておる。あの塩が峰神社。助六さんが褒美の塩の俵と神様(※1)と担うて、塩ヶ峰の街道筋で一休みしたら、神様が動かなくなって、オーク(※2)が折れて、塩の谷へ塩の俵が転んで、あそこが「塩」という地名になった。

(※1) おそらく御神体の石。(※2) 荷を背負うための棒状の木。

そうかんさんの話

そうかんさん（※1）がまだ健在で生きちゅう時に、八幡様^{はちまんさま}へお参りに、そうノ市さんというその太夫さんと京都へ、いざなぎ流の位を受けに行ってきたという話がある。人足ちゃった、そうかんさんは。母の言うには、そうノ市さんの人足で行って、そうノ市さんという太夫さんが2階で許しを貰いゆう時に、その下で待ちよったんちゃって。ほして太夫さんちゃけん、そうかんさんもね、今、許しを貰いゆう頃ちゃという時に、手の窪を上に向けて手を組んで拝んだら、米粒が落ちてきた。これはどうするかと思うた時に、これはもう頂けと思うて、米粒を頂いた。それで位があつたんちゃということを言うた（※2）。

（※1）いざなぎ流の教祖。「そうかん」は死後の名前。（※2）いざなぎ流では占いをする時など神事の際に米粒や小豆を用いる。米粒によって位の許しの可否をも占ったと考えられる。

法比べの話

中尾の八幡様へお参りに来とる時に、そうかんさんとそうノ市さんが出会うたんぢゃね、八幡様の縁日の時に。2人が「法比べ^{ほうくら}をしてみようぢゃないか」ということになって。法比べを言うても、「京都へお前人足で行ったばあぢゃ」と言うんで、「そんなら一度場所を決めて法比べをしようぢゃないか」と。そうノ市さんは、「わしが偉いんぢゃ」と。「いやわしもそりゃ、ふるわんことはできるぜ」とこういうことで、別府の落合に杉熊川と出会うた所に、両方の対岸に立って、呪文を唱えて法比べをしたという話がある。その場所に「法の石」、というところがあって、そこへは末代まで上がってはいかんということになっちゅう。その法比べをした時に、双方とも同じくらいがあつたもんで、川の水が氷柱になって舞うて上がった、という言い伝えがある。

【伝説の特殊な例】

普請^{ふしん}の時の唄（※1）

この家 お家の 石の口 大黒柱の搗きはじめ 辰巳の方へ搗きまわし 戌亥の方へ搗きおさめる 悪事災難搗きのけて 福德幸い搗き寄せて 子孫は栄えて 富貴^{ふうき}繁盛^{はんじょう} と搗きはじめた やれまかしょうの どっしんと

（※1）この唄を歌ってから、石の口を搗く作業を始める。

【昔話】

番所^{ばんしょ}と不入山^{いらすのやま}の話

別府には番所^{ばんしょ}があつたんでねえ、阿波土佐の。その番所のそこへ奉公に上がる人がおつた。奉公というか番所の中の仕事の。別府の番所も範囲が広くて、四ツ足峠まで全部所有地ちゃったん。作るところも広がったし、山の仕事をしても。そういう中でするのに、子供を小さな連れたお母さんが仕事に行って。行ったら山の穀物を取って、伐り畑のね、うちへ持って来にやいかん。自分の赤ん坊も背負わないかん。けんど自分の子供よりか、その仕事を、大事にしてもらわないかんという、庄屋さんのお達しで。子供はスキ（※1）で、木のねき（※2）の杭へ縛って、うちへ取った穀物を持って帰って。その子供を迎えに行ってみたら、スキだけしかない。子供がいなくなっちゅう。さあそのお母さんは、一生懸命探していると、子供の泣き声が聞こえだした。それを夜が明けるまで追わえて探した。という言い伝えがある。その山は今でも「不入山^{いらすのやま}」と。

(※1) おんぶ紐のこと。(※2) そば、かたわらという意味。

太刀の舞の話

曾我神社というのが徳島の方から街道を通って、赤岡の塩田をしょった所へね、塩買いに行きよった、馬で。その時代のエピソードと言うか話もあるけど、うちの方で、いざなぎ流の太夫さんが剣の舞と言うのを、恐らく曾我神社と思う、赤岡にある。あそこで毎年集まって、方々から。ただ、この別府から行った太刀の舞が華やかで、人気があつて、他の所よりあれなんで、祭りの日を、一夜遅らして通知が来て、太夫さんが太刀を負うてお祭りに行きよったら、臼木のトンネル、大橋の下に、あその上を通った街道筋に、そこ行っで一休みしよったら、その守り子さんが、「一夜遅れの神参か」言うて、「しもうた、日を違えて案内せられたもんで、昨日で終わっちゃった」というところで。太刀を一度外に出したら、目的の神社で舞わんとおさまらん、太刀の舞をどうしても舞わずに帰るわけにはいかんけん、その家地で舞うて。帰るつもりで舞うたら、臼へ太刀が当たって火事になった、という言い伝えを聞いた。

兄弟の怪力の話

その助六さんと言う方は、昔の9尺もあるような大変大きな、各家庭には、百姓するのにたまり(※1)があつた。兄さんの方はたまりを造るところを、1メートル50センチくらいの深さに、9尺の直径のを、昼までに堀あげてしもうて、その弟さんの方は、山へクレ(※2)にする木を伐りしないで。そのたまりに使うクレを、伐りに行って、背負うて帰ってきた、大きな丸太を。ほして兄弟で、両方に柄のあるオガ(※3)でね、それを兄弟で朝一切って来たのを昼から引き割って、その兄さんの方は、床を掘っていた。それを昼までに負うてき、昼までに掘って、昼からは兄弟でそれを引き割ったと。

(※1) 便所の意。(※2) 桶のこと。(※3) 大型の木挽き鋸のこと。

【世間話】

かいつりの話

かいつりに行ったら、ほっかむりの代わりに、嫁さんの腰巻をかぶって行ったもんが、おったそうぢや。

託宣の話

自分が一番記憶に残っちゅうのは、戦争でフィリピンの南の方の、何というかわからん島で、自分の義理の兄貴が亡くなっちゅう。そういう人がね、どういう最後を遂げたのか分からん。それを、家祈祷した時に、いっぱい想いや、残って伝えたいこともあつたろうにというそのもとに、家祈祷のときに、そういうものあれば、軍八幡様というものにする時に、伺いをたててした時に、やはり託宣と言うものを降ろすんぢやね、太夫さんが集まって。その託宣と言うのは、1つの占いの、そのものに成り代わって、言葉を発する、そういう神がかりのあれをしょった。自分は何回もは見たこと無いけど、昔それを見たとき。輪になって、神楽舞というので、太夫さんがくらえて(※1)、太夫さんが神がかりがきたら、舞を舞いだしよった。それが倒れるまで舞うもんで、倒れんうちにタヂカラオノミコト(※2)ぢやないけど、力の一番ある、若い元気な太夫さんが抑えちよく。そのときに、「私はこういう戦地で、こういう務めをしょった中に、敵の弾を、当たって、こういう不慮の死を遂げた」というのを、「託宣降ろし」というてしよった。太夫さんが、終わったらお祓いを

して元のに戻しちよった。

(※1) 仏道の修行を積んで、神様の位にすること。「いざなぎ流」では修行を積んだ太夫は神様になる。

(※2) 天岩戸を押し開いた神。

5. おわりに

ご協力いただいた話者のお二方は、高齢の男性であり、岩原の下村さんは84歳、別府の松本さんは75歳である。年齢は9歳の開きがある。しかし、話の内容としては、それほどジェネレーションギャップというものは見られなかった。相違点といえば、やはり地域の信仰の違いである。何よりも、物部岡別府の松本さんの「いざなぎ流」の影響が非常に強い。

岩原にも、「岩原神楽」という独自の舞、行事があるが、別府ほどの一般生活への密接な関係性は見られなかった。また、岩原では戦後に、神や仏をいった類のものを軽んじる向きがあったという。岩原では頭屋を定期的に各家が持ち回りで行っていたが、それを嫌がり拒否する「ハネカケアイ」をする家が続出したと言う。かつては頭屋を務めることは誉れと考えられたが、戦後の特に生活の苦しい時期に、そんな余裕は無い家が多かった。その時に、本来であれば伝承されていた昔話や言い伝えの類もあったかもしれない。

一方、別府では、松本さんの家をはじめ住民たちは、「いざなぎ流」にまつわる生活を基本とする。いつでも生活の全般に関係し、家の水場から、かまどから、いたる所に神様がいると考えられている。そのことが、おそらくは民話数が大差ないにも関わらず、分類に差が出た理由だと考えられる。

今回、民話の分析・考察までは述べず報告に留まったが、今後の課題として、さらに民話の収録数を増やして、体系的記述と分析・考察を試みたい。その上で、「言語文化教育」に民話研究をいかに還元できるかについて、プロジェクトとしての議論を深めていきたい。

本稿を成すに当たり、岩原の下村堯基さんと別府の松本善夫さんには、大変お世話になった。お二方には、これまで民俗・言語調査の際にも、お世話になっている。ここに記して、感謝申し上げたい。

【注】

- (1) 福田 (2000 : p.5) 参照。
- (2) 福田 (2000 : p.7) 参照。
- (3) 立命館大学説話文学研究会編 (1983:p.12) 参照。
- (4) 立命館大学説話文学研究会編 (1983:pp.14-26) 参照。

【引用・参考文献】

- 石井正己編 (2016) 『昔話を語り継ぎたい人に』 三弥井書店
- 市原麟一郎 (1972) 『土佐の民話』 土佐民話の会
- 高知県立歴史民俗資料館編 (1997) 『いざなぎ流の宇宙—神と人のものがたり—』
- 小松和彦 (2011) 『いざなぎ流の研究—歴史のなかのいざなぎ流太夫—』 角川学芸出版 p.4
- 坂本正夫 (1976) 「(地域別) 民話調査・展望と視点 四国」『國文學 解釈と教材の研究 民話の手帖』 11月臨時増刊号 學燈社 pp.156-157

- 常光 徹 (2000) 「民話の調査と研究―初めての調査地で論文を書く―」『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社
- 釣井龍秀編 (2011) 『豊永郷文化通信 3』NPO 法人定福寺豊永郷民俗資料保存会 p.1
- 野村純一編 (1991) 『別冊國文學 No.41 昔話・伝説必携』學燈社
- 福田晃 (2000) 「民話とは何か」『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社 p.5、p.7
- 松尾恒一 (2011) 『物部の民俗といざなぎ流』吉川弘文館
- 立命館大学説話文学研究会編(1983)『高知・西土佐村昔話集(昭和 52 年度・53 年度調査報告)』青文社
p.12、pp.14-26

【引用・参考URL】

- 梅野光興 「いざなぎ流―祭文と呪術テクスト―」『第 3 部会日本宗教と儀礼テクスト』
(国際研究集会プロシーディング第 4 回国際研究集会報告書)
<https://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/result/pdf/146-156%e6%a2%85%e9%87%8e.pdf>
- 大豊町教育委員会「岩原・永渕神楽(無形)」『おいでよ! おおとよ』
<http://www.town.otoyo.kochi.jp/life/detail.php?hdnKey=445>
- 小松和彦 「いざなぎ流とはなにか」『公開シンポジウム: いざなぎ流研究の新時代へ』(基調講演 1)
https://www.wako.ac.jp/_static/page/university/images/_tz1306.fc45f6a0cbd1ff66af3d23141612c66a.pdf#search=%27%E3%81%84%E3%81%96%E3%81%AA%E3%81%8E%E6%B5%81%27

(はしお なおかず・本学教授)